

■ ジョウゼフ・コンラッド国際会議(ポーランド) 第5回大会

2011年7月12日から16日にかけての5日間に渡り、ポーランドのルブリン市にある Maria Curie-Skłodowska University のキャンパスで、第5回ジョウゼフ・コンラッド国際会議が開かれた。この国際学会は今年でまだ5回目であるが、1991年から5年毎に開催されているため、学会の歴史は古いと言える。研究発表は、後に *Conrad: Eastern and Western Perspectives* と題して、Maria Curie-Skłodowska University の出版局とコロンビア大学出版局から単行本として出版されているように、この学会はポーランド政府からも援助を受けている、ふたつの大学の共同プロジェクトである。朝早くから夕方まで長時間ではあったが、日本の蒸し暑さをしばし忘れ、大学構内に聳え立つキュリー夫人の銅像が見守る中、ふたつの部屋で46の研究発表が同時進行した。発表者は約半数がポーランド人であったが、ウクライナ、イラン、アメリカ、イギリス、スイス、オーストラリア、日本、トルコ、台湾、フィンランド、ドイツ、ハンガリー、韓国、カナダと15ヵ国もの研究者達が参加した、まさに国際学会であった。

学会の概要としては、まず第一日目は G. W. Stephen Brodsky 氏による “The Dispossessed: Joseph Conrad as Borderland Writer” と題する全員出席の基調講演があり、最終日には Sooyoung Chon 氏による “Zizecian Spectres in Conrad, or What Happens to the Hoard of Gold in *The Rover*” と題する講演があった。本年度は日本からは三人の研究者が出席し、コンラッドの終生にわたる日本への関心を、マルセイユ時代、日露戦争時、晩年における日本の英文学者との関わりにおいて論じた田中賢司氏による “Joseph Conrad’s Interest in Japan”、“The Secret Sharer” における船長とレガットの関係を、デリダの理論を援用しながら、これまでの自己との再統合への物語との解釈に対して、むしろ絶えず他者になろうとする物語と論じた山本薫氏による “Hospitality in ‘The Secret Sharer’”、コンラッドの作品に見られる女性の偶像化の傾向がどこから生じるのかについて、書簡、自伝、伝記等の資料の分析を通して、祖国ポーランドの文化の観点から論じた筆者の “Conrad and the Idolization of Women” と題する3つの発表があった。研究発表で気

がついたことは、ポーランド人の参加者が多かったことと関係していると思われるが、第一日目の第1室での発表は全てポーランドとの関連による発表であり、ポーランドとの関係でコンラッドを論じる発表が多かったことである。その他の発表では、Ewa Kujawska-Lis氏による『島の除け者』の翻訳に関する論考“Why Conrad Would Not Have Appreciated the First Polish Translation of His *An Outcast of the Islands*”が興味深かった。いずれも、日本やイギリスの学会ではあまり聞くことのできない発表であった。このような中で、ポーランドの研究者のコンラッド文学に対する情熱を強く感じた。イギリスに帰化し、英語で作品を書いた作家が没後90年近くを経ても、このように愛情をもって研究されていることに感銘すらした。

5日間の日程を終えた私達は、この学会の委員長である Wiesław Krajka氏と再会を約束し、この不思議な魅力を湛えた中欧の都市を後にし、飛行機の乗り継ぎの為コンラッドが青春時代を過ごした国へと向かった。私にとって今回は、初めてのポーランドでの学会発表であった。ポーランドに一度は行ってみたいとは思いつつ、言葉が全く分からない国を訪れるということに対して最初はかなり不安であった。しかし学会出席を申し込んだ後、空港まで迎えに来てくれ、宿泊するホテルまで送ってくれることが分かると安堵した。学会が終わって感じたことは、予想を上回る収穫があったということである。思えば、コンラッドが青年時代まで使っていたポーランド語を音として一度も聞いたことがなかった。ポーランドでの学会出席は、同時にコンラッドが生まれ育った国を肌で感じる旅でもあった。この学会では、学会期間中と学会後にもコンラッドの足跡を訪ねるツアーが組まれていて、この点でも他の学会と異なる。次回の学会は、2016年である。学会のホームページで研究発表の募集をし、プログラムも掲載されるイギリスの国際学会に比べると、まだ知名度は低いかもしいが、特に若い研究者には冒険精神を奮い起こして参加してほしいと思う有意義な学会である。

— 岩清水由美子